

小田原史談

第97号

発行所 小田原史談会
小田原市南町3の21

第一回仏像・画像の 探訪の会報告

鈴木平八

日時・昭和五十四年七月八日(日)

バス一台の申込者を心配したのでありますが、定員以上となり、栢山地区の一部の会員は乗用者一台で一緒に見学しました。

熱心な同好の志と申しまうすか楽しく一日を過して参りました。不参加の方々もありましたので、中野会長の記しました同日の案内書を報告致します、併せて収支書もお知らせします。

◎真楽寺(国府津) 観山信楽院真楽寺・浄土真宗。もと天台宗の古寺であったが安貞年間、親鸞上人が七年のあいだこゝに留って観化したので、住持性順が帰依して浄土真宗に改宗して真楽寺と称したという。
◎本尊、阿弥陀如来。木造

立像、二尺九寸、親鸞上人作という。

◎阿弥陀如来画像。二軸、一は親鸞筆、一は顕如筆という。

◎松村景文筆屏風。十二双名品である。景文は四条派の大家で貞春の子、天保十四年没。

◎宝金剛寺・国府津山医王院金剛寺、古義真言宗。もと地青寺といふ、弘治年間今の寺別に改めたという

◎本尊、地藏菩薩。木造立像、一尺六寸(四九・三cm) 神奈川県指定重文、一木造りの名作で、藤原初期のもの、俗に帯解地藏と称されて安産の祈願の仏として当地方の信仰があつた。
◎大日如来座像。銅像、三八・一cm 文部省指定重文

鎌倉時代の作といわれる市内仏像中の最高位のもの。

◎不動明王と二童子像。不動は主像で、寄木造り、玉眼、彩色二尺五寸(七七cm) 神奈川県指定重文胎内に収納の文書に「延慶二年六月十二日、御身奉納之畢、同日練色始、伊賀阿者梨御房能宴、権少僧都定胤」とあるから鎌倉後期の作品であることが明かである。

◎不動明王画像。一軸、一幅の中に黒不動数体を画く。弘法大師作という。

第1回小田原市内仏像見学会決算書

収入	支出	
会費 (1,500)	ハ ガ キ	11,000円
76,000円	バ ス 代	50,000
	真 楽 寺 礼	17,000
	他 へ お	
	運 転 手 へ ガ 礼	3,000
	イ ド へ お	
	屋 食 へ 講 師	3,000
	運 送 夕 食 代	5,000
	下 見	5,000
合計76,000		94,000
差引		19,000
		(赤字)

◎東光院・瑠璃山南谷寺と号する、古義真言宗。

◎阿弥陀如来座像。青銅製一四三cm(座像のみ八八cm)裏に「承元三月己巳卯月吉日」、施主「北条義時」と淨彫に鑄されてある。もと箱根の古物商にあつたものを、曾我別所の禮家内野重胤氏が買入れ、その子内野房五郎氏が大正十年に寺に奉納したものである。

◎木尊薬師如来の木立像、二尺、寺伝に行基作という。鎌倉中期の作か。

◎不動明王座像。寺伝なきも鎌倉時代後期の作か、頗るよし。

◎泉蔵院・昭昌山大願寺と号す。古義真言宗。もと「すくも堂」という辻堂であつたのを応安年中に一寺再興として泉蔵院と言つたという。

◎本尊薬師如来座像。木造

酒 匂 鍛 冶 考

川瀬 春雄

五、鍛冶分の境界について

二尺七寸、膝の裏面に永正十二年に再造したと墨書してある。全体に老退化がすすんでいる。
◎東学寺・元光山東学寺。臨濟宗、応安年中の建立という。
◎本尊釈迦如来立像。寄木造、一六五cm(五尺七寸)、小田原市指定重文鎌倉末か南北朝時代かの作品。清涼式の作品として

て小田原地方で珍らしい仏像である。両手兩足は後補である。以上が見学した処でありますが他に、上曾我の公民館の千体仏、又東学寺では、岩不動、等を拝見することが出来て、参加会員から大変喜ばれました。次いで此の日、会費一名千五百円であります。鈴木平八記 収支を報告します。

既に記述せる如く酒匂村に鍛冶業が隆盛となった元禄の初年あたりに元村である酒匂村から今の酒匂神社前の僅かの地域を分離して「酒匂鍛冶分」と呼ぶ小さな村が小田原藩によって独立させられたのである。この鍛冶分とは正確にはどこであったのか、その境界はどうであったのか、筆者はこの素朴な疑問について興味を感じ調べてみることにした。とは言へこの事について文献や伝承も殆んど残されていない現在では簡単に結論づける事はできなかった。この鍛冶分の中

多く鍛冶業者が軒を並べていたと言われる酒匂神社前から東海道(現一号国道)迄の約二百メートル程の道路は可成り古くからの屋並で、すぐ西側裏手には風土記稿に記されている様に源義経の邸跡と言われ、將軍頼朝も上洛の折や二所権現詣にも宿泊した「はんべ御殿」と呼ばれた宿舎の跡がありその為この道路は「御所小路」と呼ばれた時代もあつたと言つ場所である。さてこの鍛冶分地域の境界を追求するに当って、毎回の事乍ら、たった一つの文献である新編相模風土記稿(以下風土記と略称)の

記述の内から、この境界に關係があると考えられる点を拾い出して、これを推理してみる事より他に方法はなかった。風土記の酒匂村の個所には「酒匂鍛冶分酒匂村より分れし地なり（元禄の改に始めて村名を載す）高わずか四十石余にて四城彼村に包まれ民戸も錯雑して一村の如し、もと鍛工四十二軒余住居せしかば地名となれり、今は民戸六十二軒の内鍛冶を業とする者わずか七戸のみなり」とある。この記述の内まず二村の境界に関わりのあると考えられる個所「四城彼村に包まれ」とある点をとらえてみた。しかしこの簡単な記述は一体何を言っているのか短時間に理解できなかつた。比較的広い地域を擁して戸数も多く大村と言われた酒匂村から分村したこの鍛冶分であるが、常識的に言つて分村する場合には、分村しようとする地域を道路或は川等を境界とし切離したのではないかと単純に考えていた。こうした先入観があった為「四城彼村に包まれ」との記述には少々戸惑った。がやがて彼村とは元村酒匂村を指し分村鍛冶分はその四圍を元村の酒匂村に包まれた形になつていたと言ふ事が理解されてきた。当時の酒匂

村は南北十町（約一〇〇〇米）東西十町と風土記に記されている。この酒村の鎮守である駒形社（現酒匂神社）の門前に目玉状に存在したと言ふ事である。之で一応アウトラインが浮び上がつてきたもの、具体的には境界線を割出す迄には行かなかつた。次に文中「民戸も錯雑して一村の如し……民戸六十二戸の内……」と民戸についての記述がある。鍛冶分の戸数六十二に対して同時点に於ける元村酒匂村のそれは百十八で合計百八十戸の二村の民戸は錯雑して一村の如しと表現されてゐる。この錯雑しては次の様に考へられる。この分村が行われた当時、街道の両側に一軒並びに細長く押し合うように建並んでいた酒匂村の集落のどこかで、この二村を切離したのであらう。その為一見しただけではどこが村境であつたのか判然しなかつたとの事である。この風土記が出来る天保十年あたりから百四十年も経過した現在、当時の村境を見出す事は容易でなかつた。そこで鍛冶分の中心部であつたであらうと言われている酒匂神社前の通りとその周辺に六十二戸の古い家々がどの様に並んでいたのか

そしてこの辺りを包みこんだ境界の道路は、川は、いづれであつたのか、近隣の古老の話なぞいろ／＼推理してみたものの納得できる線は把み得なかつた。ところがその頃偶然に問題解決の緒を発見できた。それは酒匂町の字名の記載された農地関係の地図に出遇つた事である。其時最初が目に入ったのは酒匂神社前の通りを中心にした一面に「北川端」と記された字名であつた。これは現今でも土地の年輩者の中で通用してゐて筆名も少年時代から、この字名は知つていたものの正確な図画については全然知る機会もなかつた。その地図によると字「北川端」の区画とは次の様であつた。先づその区域の南面（一）号国道（東海道）の北側にある酒匂巡査派出所の横から国道を西へ二百五十米、日蓮上人御一泊の聖地の碑のある町の西はすれ日蓮宗の法船寺迄の間で、この法船寺墓地の裏手から悪水堀と呼ばれた幅二米程の排水路の流れを溯り酒匂神社の入口を経て更に溯つて金山社跡裏の佐々木橋に出る（法船寺からこゝ迄約四百三十米）、東面はこゝから裏通りを南へ右折、田中クリー

ニング店前から住宅地の中を左折、右折と三回線返しを再び元の巡査派出所の横に出る。以上がその外面線であつた。ところでこの地図を見た瞬間「これが鍛冶分だ」と直感したのではなかつた。と言ふのはこの境界線を考へる様になつた当初から両側に民家の建並んだ東海道がこの二村を南北に分断していたとは考えられなかつたからである。ここでも亦こつた先入観が解決を阻んだのであつた。だがやがてこの字「北川端」が風土記の記述にある「四圍彼村に包まれ」と言ふ表現と合致し、又当時の鍛冶分の民戸六十二がこの区域内の道路に割當つて見ると大きい過不足がない事に気がついた時、初めて「これが鍛冶分だ」と強い確信を得たのであつた。とは云へで境界線の全部が解決した訳ではなかつた。その頃旧家の一老嫗を訪ねた時の証言によつて「北川端」の区域がその儘、鍛冶分ではなく一部修正しなければならぬ事もわかつてきた。この老嫗とは酒匂大見寺の小島三墳の血をひく旧家小島家の家付娘であつたと言ふ。その当時（五十一年）八十八才の「たつさん」は耳

こそ遠かつたが元氣に昔話をしてくれた。鍛冶分については「私の家迄は本村で西隣からが『鍛冶分』であつたと言へられていた。」と貴重な証言をきく事ができた。この証言によると、酒匂巡査派出所角から西へ二軒目が小島家で、その西隣から鍛冶分であつたと言ふ事であるが調べてみると、その西隣には境界らしい通路も何もなく、更に西へ二軒先に幅一メートル程の細い道路が北へ抜けてゐる事に気がつく、これこそ鍛冶分の境界であつたに間違いのない。以上縷々述べたが、酒匂村から分れた鍛冶分の境界はこのようなものであつたらう。さて、これで一応の結論ができたものの、またここに一つの疑問が残された。と言ふのは老嫗の証言によつて修正された駐在所横の突当り迄五十メートル程のこの道路は幅三メートルもあつたのに何故鍛冶分の境界とされなかつたのだからか。その理由は何であつたのだろうか。この点も是非解決しなければならぬ事であつた。これについても近隣の古老からいろいろと話をきいてみた。ところが意外と容易に次の様な答が返つてきた。「この

道路の奥には中華寺があつた」と言い、又別の老人は「この通路は葉師さんの大門」と呼ばれていたとも語つてくれた。風土記によると中華寺は村内上輩寺、下輩寺と共に七百年程昔酒匂の頭家であつたと言ふ酒匂右馬頭によつて建てられたもので「境内には葉師堂があり、本尊は賢問子芥子園作の立像、長さ二尺五寸七分、日光月光十二神をも置く」と記されている。この中輩寺の入口の道路を「葉師さんの大門」と呼んでいた事は之で納得できる。これ等の証言や風土記の記述等では明らかになつた様に、この中三メートル突当り迄五十メートルの道路は中華寺の門前であつて、明治以前は現在の様に左折して北へ通り抜けられなかつたものであらう、それ故鍛冶分の境界とならなかつたのである。（中輩寺は明治二年の時点で存在していたことが小田原天主閣の資料によつて明らかである、その後何年か経て廃寺になつたものである。）

◎鍛冶分と駒形分について
相模風土記稿酒匂村の項駒形社（現酒匂神社）について記述の中に（北条役帖）幻庵内室の知行中に四十貫二百五十文、酒匂内駒形分と見ゆ。

則当社の事なり。……今も社地及びこの外供免五石六斗余の余地を付す」とある。駒形社とは現在の酒匂神社の前身で明治初年に改称されたものである。この酒匂内駒形分と呼ばれた地域は即ち社地を指したものであったろう。

この駒形分と言う呼び名は酒匂村の小字名として其の後永く江戸期にまで続いてきたものではないか。元禄の頃にこの駒形社の門前は言うに及ばず、酒匂村一帯にわたって四十数軒の鍛冶業者が繁栄した事によって鍛冶分と称する小さな村が誕生した訳である。さてこの新しく生れた鍛冶分地域が果して北条役帖に

記載されている幻庵内室の知行中の駒形分そのものであったかどうか、多分に興味の点であるが、これについて今明らかにする術もない。しかしこの両者は全然別個のものであったとも考えられない。鍛冶分が誕生した元禄の改の際の様な立場の人が鍛冶分なる村名を考へ命名したのを知るべくもないが、鍛冶村と呼ばず鍛冶分の分が付いたと言う事を考えるとき、北条時代から長年呼び慣らわされてきた駒形分の呼び名の名残を止めたものではないかと言いう事が充分考えられる。昭和五十四年八月五日記

相生松と

曾我城趾の事

神保 酉蔵

建久四年五月二十五日曾我兄弟が父の仇工藤祐経を討つ為に鎌倉から帰って来た。数日前から十郎の帰りを待っていた虎御前は大いに喜び其の夜は二人は悲しい今上の別れであった。明日は富士へ出立せねばならないので、十六日早朝に起き出た十郎は、団三郎に馬

の用意をさせ、五郎に富士裾野に行く用意をして置く様に云い捨てて、虎女を馬の背に乗せ団三郎に馬の手綱を取らして、自分も馬に乗り中村道迄送らうと、山彦山迄行く十郎は、此処まで登って来れば馬も疲れたであろう、一休みして行こう、と松の切株に腰を下

すと、のう殿、今此世で別れても私の魂は貴下の側を離れませんがと云い乍ら思わず抜きとった赤松の子、十郎はそれを手に取り、おおては女松、どれ私も、おまゝいぞと云いつつ其の松を二本寄り合せ、土中深く差し込んだ。二人の魂の籠った松なればこそ七百年も長生して居たのではないかと思ひます。

此の様な霊界の事は、化学では割り切れないではないか、とも思ひます。それに付いて曾我氏の事で皆さんに御知らせ致したい事があります。と申すことは曾我氏は十四代、時の小田原北条に征められ、城及び全武家屋敷及び菩提寺であった宗泉寺、宗我神社他の寺々までも焼き払われ、家臣はほとんど戦死して、残るは僅か近臣三百六十余名、城に引上げ城主と共に敵を恨みつつ、無念の腹を切ったと云う。昔から古老たちの云い伝えであり、そして又城の焼跡からは、時の侍大将であったと云う、神保経部と云う人の兜の中に祠つてあったと云う金の魔利支天の像が出土して、神保家では家宝として大切に祠つて置いてある。而し此の城跡には何の示

票もありませんが、明治二十五年迄は城の石垣も歴然と残って居ったが、時の資産家の手に依って持ち去られて、今は只蜜柑畑になつて了て居るが、昭和十八年に城跡に御霊社を建てる心算で時の村長が、曾我兄弟の遺跡保存会長であったので、其の時の地主から六十歩の寄進を受け、村の共有地として登録して置いたが、終戦となり村長は公職を免ぜられ、同二十二年には農地開放となり、此の村の共有地も個人の物となつて了れず致方がないので、たとえ三歩でも買取つて小さくとも早く御霊社を造り、供養をしてやらねばならぬと急いで居ります。



千代の「草燃える」

富田 千春

今年の、NHKテレビ、大河ドラマに源頼朝、北条政子を扱った「草燃える」が演じられている。八月十九日の第三十三回は、「姫君毒殺」の題名で放映された。前回は頼朝の死であり、頼朝の亡きあと、北条政子は二代將軍に頼家を立て、次女の三幡姫の入内に奔走していたが、頼朝の四十九日の法要の前夜から、三幡姫が発病し、京都の名医、丹波時長を招いたが、却つてこれに毒を盛られ、正治元年六月三十日、三幡は十

私もたらず乍らも少しでも知りたいものと修業は続けて居りますが八十二才では、命の方が先に後つて了うのではないか、後十年も生きる事が出来れば可々上記の様に赤枝と黒松の枝が生えて一番下枝は大人の手の届く程でした。私は少年の頃から青年になつても此の山道を何回となく通り山の畑に行き帰り致しましたので今も目を閉じると此の様な松の姿が目

に浮びます。

の像を祭ると共に「此の堂則ち頼朝郷建立なり」と云う当時の棟札、燼余の片端を蔵していた。

長さ二尺、巾三寸、厚六分許りの板には、「奉造立一間四面堂一字」、「大檀越從二位前右近衛大将権大納言源朝臣頼朝云々」と、「平朝臣時政比丘尼妙法藤原親能」という文字が三行に書かれている。

藤原親能は、掃部頭中原親能で、頼朝の息女、乙姫の乳母の夫であり、乙姫死去の時、薙髪して出家し、「寂忍」と号したといわれている。

則ち乙姫の乳母である親能の婦が、姫の為に此の像を信崇し、頼朝が建久の頃に、建てたものであらうという。

新編相模風土記は、天保年間(1830-1843)に書かれたもので、その当時は、長立寺も、乳母神堂も、存在していたが、文献によると、明治五年、無禮、無任のために廃寺となり、遺物は近くの円宗寺に移管されたとある。

円宗寺では、今でも長立寺の本尊、阿弥陀如来像、その横に大黒天も安置し祭られているが、面白いことに、この大黒天を地元の人々は、乳母神様ともいい、百日夜や、ぜん息には効驗あらかたて、流行時には参詣

人で賑はったという話をきいている。

政子は頼朝との間に、大姫、乙姫の二女と頼家、実朝の二男があった。大姫については、テレビでも中々人気のある存在で木曾義仲の嫡男、清水冠者義高が人質の様に送られたのを、婚約者として迎えられたが、頼朝は、まだ十才程の義高をも殺してしまつた。大姫はまだ六、七才であつたが、許婚者が無残に殺されてのち、悲嘆の極病床に臥し、永年哀しみの生活を送っていた。

頼朝は、叔父の行家、従弟の義仲、その子の義高、弟の範頼、義経と身近の人物を片端から死に送っていた、冷酷、残忍な人であつたが、大姫は、婚約者を殺され、静御前をかばい乍ら父の頼朝に「鬼だ。けどものだ。人の心もない。お父さんは地獄に落ればよい。」等々云つて、陰惨な、やりきれないドラマに、一服の清涼剤を送つてくれた場面があり、胸温る思いがしたその大姫も二十才になるかならずの短い生涯を終つた

姉の死後二年目、頼朝が正月に亡くなり、その年の六月に乙姫は亡くなつてゐる。政子は、息子を決して甘やかさなかつたが、娘たちは

には優しく思いやり深かつたといわれている。政子は長女の大姫と、夫の頼朝を次々に亡くし、残された一人娘の三幡の発病に「あなたは、子供の中で一番丈夫の子であつたのにどうしたの?」と心配そうに云うた

「お母さん、私大丈夫よ、大丈夫よ」と連発し乍らも遂に亡くなつてしまつた時政子尼御台所の御嘆息は筆舌につくせぬ物があつたであらう。

そのあと頼家は二十三才で修善寺で、実朝二十八才で鶴が岡八幡宮の大銀杏の側で非業の死をとげ、源家嫡流の血はわずか三代で滅び去つていった。

暑かつた今年の孟蘭盆会もすんで、テレビの「草燃える」を見て、近くに居ながら久しく行かなかつた、長立寺の廃寺を訪れた。昔は古刹として、隆昌を誇つたであろうこの寺も、今は僅かに蜜柑畑の残さ四、五坪程の草むららが隅々をのびるだけで、そこに丸い形の依職の墓、その他若むした墓石が十基程、コの字形に並んでいる。誰が上げたのか、お団子、お菓子等のお盆のお供え物と、香の花が上つてゐた。

があり、それを囲んで築山東屋等の庭園があつた。それで池鏡山といつたのであろうか。それも今では跡形もなくつぶされて畑になり蜜柑が植えられている。でも、春秋の彼岸には近所のお年寄が集つて、お念仏を上げて供養しているという事だ。

と物すごい豪雨となり、元の様に埋まつてしまつた。それきり掘らなかつたといっていたが、本当の話かどうか。

鐘の埋つたという深田あたりも数年前、大型のダンブで大量の土砂を運びこんで埋立てられ、今では住宅がポツ／＼建っている。テレビの大河ドラマ、草燃える、を見、長立寺墓地乳母神堂の跡に立つて、大姫、乙姫の冥福を祈りながら、建久の昔を偲び、「夏草や、つわものどもが、ゆめの跡」の句をしみじみと思つた。(吾六三亭記)

長立寺は池鏡山と号したといわれている。私達が子供の頃は、近くに立派な池

百六年を迎えた吾が国鉄と

外国鉄道の四方山噺

額田 喜代春

(A)東海道線の全通
明治十年十月十四日(太陽曆)新橋―横浜間に明治天皇の臨御の下に開業式を行ない、これにひき続いて一八七四年(明治七年五月十一日)には大阪―神戸間にも鉄道が開通し、日本各地で鉄道の開業が進みました。

それからは、政府の経営する国鉄だけではなく、一般の人々に鉄道が企業として、利益があがることわかつてきたので、資金を出し合つてつくる私鉄も現われようになり、遂に明治二十三年頃以後には、私鉄は常に国鉄の二倍ぐらいの路線で営業するようになったのです。

西本線は関西鉄道会社、山陽本線は山陽鉄道会社というように私鉄であつたのです。それから東海道線は明治二十二年二月一日国府津駅から松田、山北、御殿場回りで静岡まで延長して、すでに開業しておつた静岡以西とつながつて、東海道本線として神戸まで全通したのです。

ところが、最初の計画では海岸をきけ、中山道にそつて日本の中央高地を横ぎる予定でしたが、工事のむずかしい事がわかり、東海道ぞいの海岸地帯に変更されたのだそうです。そしてその頃の客車は上等、中等下等の三階級に分かれ、下等車の椅子は板張りで、長い時間乗っていると、おしりが痛くなり、暖房もないので冬の旅行では、体がすつかり冷えてしまつたという事です。また夜になると石油ランプに火がともされました。

(B)最初の電気運転
一八九〇年(明治二十三年)東京の上野公園で開かれた観業博覧会で日本最初の電車が運転された。それまで都市の中の主要な交通機関は馬車でしたが、これを電車に変えようという人々が各地に現われました、けれども、電車に対する認

識が足りなかつた時代であつたので、電気は危険だといふ理由で、なかなか許可がおりませんでした。所が漸く一八九五年(明治二十八年一月三十一日)日本最初の電車の営業運転が、京都電気鉄道会社によって始められた。最初の区間は、京都と伏見を結ぶ区間で、市電が時速八哩(約十二・八キロ)以上出してはいけ

ないことになっていましたから、現在の自動車位だったので、現在の自動車で歩行者かはねられるということがあつたので、人の多い所では、旗を持った人が先に走つて行つて知らせたそうです。

それから続いて、名古屋川崎等でも開通して、間もなく大阪、東京でも運転されました。

⑧ 京都に次いで、明治二十一年十月一日開業の小田原馬車鉄道(八哩三八チエーン、軌間三呎六吋)のレールを利用して(軌間を四呎六吋に拡げて)小田原電気鉄道が明治三十三年三月二十日国府津から小田原を經由して箱根湯本まで一時間で運転した。

(付)D51の誕生
D51形蒸気機関車は一九三六年(昭和十一年)に初めて作られた貨物用の蒸

汽機関車です。そして一九四五年(昭和二十年)までに千五百十五両もつくられましたもので、吾が国では最も多い蒸気機関車です。この機関車は日本中至るところで使われ「デゴイチ」というニックネームで親しまれてきました。そして、その第一号機関車は、現在京都の梅小路機関区に動態保存されています。

⑨ 蒸気機関車の発達
第一次大戦後(大正時代の後半)東海道本線、山陽本線をはじめとする幹線鉄道の輸送が急にふえたためいままで以上に強力な機関車をつくる必要にせがまれてきました。

そこで、旅客用のC51形(一九一九年以降)、貨物用のD50形(一九二三年以降)が新しくつくられました、いずれもその後の蒸気機関車の発達の基本となつた形式です。それから昭和の時代に入ると、東海道本線、山陽本線の特急、急行用のC53形と、C59形。一般旅客用のC55形と、C57形。貨物用D51形とD52形などがつくられました。

(六〇七)という狭い軌間(レールの間かく)の狭軌鉄道の性能をもつ蒸気機関車が揃つたのです。

(付)SL(蒸気さよなら)

新幹線の話
オリンピックが東京で開かれた一九六四年(昭和三十九年十月一日)東京と新大阪の間に新幹線が開通しました。

新幹線は、特に旅客の利用の多い大都市どうしを結び、最高時速二百十キロで走る超高速列車です。それから一九七二年(昭和四七年)には岡山までのび一九七五年(昭和五十年)には九州の博多まで開通しました。これによって新幹線による旅客の輸送力は、いちだんとふえました。

そして新幹線は更に東北上越、成田、北海道、北陸九州の各線が現在建設中又は調査中です。また線路の幅も今までのものより、三六八ミリも広くなり、スピードが速いため、カーブも大きく、ゆるくしてあるため、全線を通して踏切りが出せるのです。

それから高速で走るため運転室の窓は見通しのよ大きくように広く、大きくしでありました。尚、運転席の前には、運転に一番重要な主制御装置とブレーキペンを中心に、速度計、電圧計空気圧力計等の計器盤が

かれています。また、後ろには、A・T

・C装置がおかれています前頭部のボンネット内は機械室になっていて、A・T・C電源用の機器や、その冷却装置がおさめられています。

それから、東京の総合指令所にC・T・C装置が備えつけてあつて、東京一博多間の列車の位置が列車番号と共に、一目でわかるようになっており、各駅の信号機やポイントの操作を集中的に管理しているので、中間の各駅は何等手をくだしません。

それから食堂車は外側に車内を通りぬける廊下があるんで、お客さんは、おちついて食事が出来ます。また走っている車内から、ダイヤルで公衆電話がかけられますから、留守中の家族とお話ができます。

(付)気動車のはなし
ディーゼル動車(気動車)は、客車の床下に高性能のディーゼル機関をそなえてその回転を伝達装置を通して車両に伝えて走る仕組みになっています。

伝達装置の種類には、液体式と、発電機を回して、モーターを使う電気式とがあり、吾が国では総て液体式が使われ、燃料は軽油を使用しています。

ガソリン機関を使った車両で、ほとんど一両だけの運転でしたが、戦後はディーゼル機関と液体変速機によって、二両以上連結して運転できるように発達しました。そして初めは、ローカル線だけでしたが、只今では電化されない幹線で特急にも活躍するようになりました。それからその形式は、キハ400形、キハ500形、キハ400形、キハ15形、キハ55形、キハ58形、キハ35形、その他特急用として80系、112系、115系等があります。

(付)電気機関車のはなし
東海道本線で特急列車用としてE F 65形直流電気機関車があります。

電気機関車の仕組はパンダグラフから、とり入れた電気を抵抗器で電圧を加減して、主電動機を回し、その回転を小歯車と大歯車で車輪に伝えて走ります。

それから、国鉄最初の電気機関車は一九一一年にドイツから輸入したE C 40形で、これは信越線の横川一軽井沢間の急勾配用に使われたもので、その後、同目的のために、国鉄の大宮工場が一九一九年にE D 40形が最初の国産電気機関車として製作されました。

それから一九二五年に東海道線、東京側と横須賀線

の電化の時には、電気機関車はすべて輸入されましたが、その後、漸く民間のメーカーで製作されるようになり、戦前の国産機は、外国からの輸入機を改良したものでした。

戦後、交流電化をとり入れたのを機会に電気機関車は大変進歩しました。そして、種類も直流用、交流用、交流直用等、使用する線区にあわせ、引く力の強い、すぐれた電気機関車が製作されるようになりました。

その形式はE C 40形、E D 40形、E D 50形、E D 15形、E F 52形、E F 55形、E F 57形、E F 13形、E F 58形、E F 15形等、その外用途に従つて十数種にのぼつております。

(付)電気機関車の種類
電気で走る車両には、架線から取り入れる電気の種類によつて、交流、直流、交流直流、電気車両の三種類に分かれていて、電気車両に使わせる主電動機(モーター)には、直流式と交流式とがあつて、その回転力の性能は、直流式だんぜん優れております。

鉄道が初めて、電気車両を運転した時から主電動機は直流式を使い、現在、世界的にも直流式が多く使われております。

は、交流なので、直流式で運転するには、途中で交流電気を直流に変えなければなりません、そのため、変電所で交流電気を、電圧を下げながら、直流電気に変えてから、車両に流します。また、交流式で運転するには、変電所で電圧を下げるだけで、そのまま、車両に流し、車両の内部で直流電気になおして使います。ですから、交流流ならば、交流でも直流でも運転できる仕組みになっております。

(a) デイジーゼル機関車のはなし

力の大いきデイジーゼル機関を床におき、その回転を液体変速機などの伝達装置を経て、車輪を回わすしくみになっております。ですから、蒸気機関車にくらべて効率が高く、出力の性能もすぐれているため、蒸気機関車のをひきうけて、電化されてない線区で活躍出来るのです。

日本のデインゼル機関車は、大東亜戦争前にドイツから、試作機が輸入されましたが、日本の技術力不足や油の問題で不成績に終わってしまったのですが、戦後になって、本格的な標準機として、うまれたのが、DF50と、DD二三でした。それから、研究と改良を重ねて、大形標準機のDD51が誕生しました。

ねて、大形標準機のDD51が誕生しました。それから、デイジーゼル機関車は、蒸気機関車の無煙化を促し、その後を以て、電化されてない線区で、大変活躍しています。また、DC形機はドイツから輸入した国鉄で最初の機関車です。それから、第二次大戦前に試作された国産の機関車はDD10形機関車です。その他、DD50形、DF50形、DD13形、DD14形、DD51形、DD54形、DE10形、DD16形等があります。

(b) 貨車のはなし

貨物を運ぶ貨車は、貨物の種類によって、いろいろな形式が使われています。また編成される列車の運転スピードによって、台車の造りなど違った形式があります。日本の貨車は、昔は二軸車が多かったのですが最近では、走る性能のすぐれたボギー車をつけた貨車がふえています。

そして、最初が小形の木製車でしたが、だんだん大型化して、鋼鉄製になりました。また、最近では貨物に応じたタンク車とか、ホッパ車等種類も多くとなり、また戸口から戸口へ運べるコンテナの専用車もふえております。

では次に用途にあった貨車の種類を掲げてみましょう。

- ① ホキ350形、35トン積み
- ② 石灰石輸送のホッパ車
- ③ ウゴ形、豚を運ぶ専用車で、内が二段になっている。上段と下段に積みめす
- ④ カ300形、牛や馬を運ぶ家畜車です。
- ⑤ ワキ1000形、30トン積みの特急用の有蓋貨車です。
- ⑥ コキ1000形、はトンコンテナを五個積めるコンテナ車です。
- ⑦ 国鉄には現在コストナは五六二二九個とこれを積めるコンテナ車は、七三三二両あります。
- ⑧ ワム9000形、15トン有蓋貨車の標準形です。
- ⑨ ワム8000形、パレット

- ⑩ 有蓋車で扉が総開き式です。
- ⑪ トラ7000形、17トン積み
- ⑫ みの無蓋車の標準形です。
- ⑬ ツム200形、果物や野菜を運ぶ通風車です。
- ⑭ レム800形、新鮮な魚等を運ぶ冷蔵車です。
- ⑮ クゴ形、自動車等中形車は八両、小形車なら十両積める車運車です。
- ⑯ ヨ300形、最後部に連結されて、車掌の乗る車掌車です。
- ⑰ セラ1形、17トン積み
- ⑱ の石炭車で下部が開きま
- ⑲ タキ300形、石油等を運ぶタンク車です。
- ⑳ ホキ250形、セメント、粉穀物等を運ぶホッパ車です。
- ㉑ チキ300形、長い材木等を運ぶ長物車です。

田島の草燃える

杉崎 正五

時節柄草燃ゆるブームの中に富田さんから千代の草燃ゆると題して面白乳母神様の原稿を送って頂きましたが、田島の氏神津島神社が北条政子に關係があるので記して見ます。

が頼朝挙兵の年、三年目の八三年に八幡宮の修築を終ると此処で八幡宮の社領として寄進したのです。

貞応二年(三三)天下に疫流行露木某なる者尾張の津島神社牛頭天王を親請して病氣平癒を祈願したところ立所にして疫病平癒したるに因りて尼將軍より宮地の寄附を頂き津島神社を建立、貞応四年六月七日最初の祭典を行ふとある、貞応四年とは嘉祿元年(三三)だと思ふが頼朝が死んだのが正治元年(元弘)二代頼家は建仁二年(三三)に二十三才で死して居る、三代実朝は承久元年(三三)に八幡宮の銀杏の下で殺されている。

四代藤原實経が將軍職に付いたのが嘉祿二年(三三)で実朝の死んだ承久元年(三三)から嘉祿二年の間七年間が北条政子が尼將軍として鎌倉幕府で政治をとつた年であり嘉祿元年六月七日津島神社竣工の祭典を行った同じ年の七月十一日に政子は死んだ事になっている。

現在の津島神社の宮地は約二反二畝であるが此の外神社の西側は今でも天王と言っている、北側天王地屋と言ふ屋敷跡ありいづれも現在は民地で大半は宅地となつて居るが此れ等を含せて約一町三反ぐらゐあつただらうと思われる。

又建立した露木某なる者は其の子孫が早川川に住して居ると言うのみで現在田島は一軒も同姓なる者はない、早川川の露木と言ふ姓の家の調査もしてないし建立当時の寄進状も見あたらない。

明治二年に戸長をして居られた石井金五郎氏の書き残された書類の中に以上の様な事と今まで金蔵院持てあつた神社を村持ちと変える時祭神の牛頭天王(印度の守護の神)より日本の神に変え様と牛頭天王によく似た須佐之男命に氏子総意により変えたと記されている。

寄進状もなし半ば伝説の様ですが神社は代々世話人も交替して居るし書類の申し送りも正確でないし寺持になり村持ちになり変遷がはげしいので古い書類は全々見あたらないが時節柄一寸面白いので綴つてみました。

編集部より

会員の皆様御健康に留意されます様、又来年は頼朝挙兵八百年祭にもなりますし、各支部各会合があると思ひますので、変つた面白原稿を御送り下さいませ。様御待ちしております。

杉崎